

マイクロ・アグレッションはなぜ差別と言えるのか

池田喬（明治大学）

1. マイクロ・アグレッション(Microaggression)とは何か

□ Derald Wing Sue の三つの区別 (Sue 2010a)

1. Assault (襲撃) : (たいてい意識的) 標的となる犠牲者を傷つける意図をもって、言語的、非言語的、環境を通じて暴力的に攻撃することを第一の特徴とする、人種に関する表立った価値の貶め (derogation)。中傷すること、避けること、目的 をもった差別的行為による。例: ヘイト・スピーチ
2. Insult (侮辱) : (たいてい無意識的) 無礼や無神経さを伝え、ある人の人種的な由来を貶める (demean) コミュニケーション
3. Invalidation (無効化) : (たいてい無意識的) 有色の人の心理的な思考や感情、あるいは経験された現実を、除外し、否認し、無化するコミュニケーション。

1 「生まれはどこですか」「英語がうまいですね」「この言葉はそちらの言葉では何と言うのですか」 Alien in One's own Land (アジア系やラティーノのアメリカ人は外国生まれだと思込まれる)

2 「肌の色は見ていませんよ。あなたのことを見えています。」「世の中には一つの人種しかありません。人類です。」 Color Blindness (白人が人種の事実を認めたくないことを含意する発言)

3 「私は人種差別主義者ではありません。黒人の友達もいるんですよ。」「雇用者として、男女をいつでも平等に処遇しています。」 Denial of Individual Racism/Sexism/Heterosexism (偏見の存在が否定される時になされる発言)

4 「最も適正の或る人がこの仕事を得るべきだと信じています。」「男も女も、業績に対する平等な機会をもっています。」 Myth of Meritocracy (人種やジェンダーは人生の成功において役割を果たしていないと主張する発言)

本発表では、3の例1「英語がうまいですね」を取り上げる。これがなぜ差別発言なのか、最もわかりにくいと思われるからである。

□ MA (2と3) の特徴

意図的でない、無意識的である (←→ ヘイト・スピーチ)

合法である (←→ ヘイト・クライム (ヘイト・スピーチ))

凡庸かつ日常的かつ大規模 (←→ ヘイト・クライム)

社会的不利益を生むわけではない (←→ 他の居住者の反応を理由に人種に基づいてアパートへの入居を拒否される)

哲学・倫理学の文献には現れない (←→ ヘイト・クライム、社会的不利益を伴う差別)

被害者が非難される (←→ ヘイト・クライム、社会的不利益を伴う差別)

(「気にし過ぎ」「本人は悪いつもりはない」)

2. なぜ MA を取り上げることが重要なのか

- 日常的にも哲学の文献でも経験が無視される一方、大きな害が帰結している
- 日常的にも哲学の文献でも経験が無視される一方、顕在的な差別の基盤と見なされうる
- 害の大きさと構造的重要性にもかかわらず経験を無視するのは理論的欠点だと思われる
 - ・ MA は、凡庸さ、日常性、大規模さ、見えにくさ、根本性ゆえに、理論的に不可視化されやすい。
 - ・ 理論が問われているのではないか。(1) MA を等閑視することは MA の助長に加担することにつながる（例えば、差別の悪を加害者の動機に還元的に求める理論は、「本人に悪気はない」として被害者が非難されるという MA に特有な害を助長するかもしれない）。(2)しかし、では、動機にも社会的不利益にも不当さの根拠を見いだせないような差別をいかに哲学が分析できるのだろうか。

3. MA に関して哲学に何ができるのか

- Sue が残した問い

Sue の例：

Theme	Microaggression	Message
Alien in One's Own Land	"You speak English very well."	You are not an American.

問 1：なぜ「英語がうまいですね」という発言が、「あなたはアメリカ人ではない」という隠れたメッセージを伝達できるのか。

問 2：なぜこの発言からそのメッセージが伝達されることが、「自分自身の国における疎外」として理解されうるのか。

- 発表当日の提案

- ・ MA 発言を一つのスピーチ・アクト（言語行為）として分析する。
- ・ 道徳的不当さの根拠については、動機説でも帰結主義でもない、第三の「意味説」を採用する。
- ・ 行為の動機でも結果でもなく、行為そのものの意味を問い、その不当さを示す。

【文献表】

- Clark, H. H. and Gerrig, R. J. (1984). On the Pretense Theory of Irony, *Journal of Experimental Psychology*, 113 (1), 121-126.
- 江口聡 (2010). ポルノグラフィと憎悪表現. 北田暁大 (編) 自由への問い(4) コミュニケーション 自由な情報空間とは何か. 岩波書店.
- Grice, P. (1978). Further Notes on Logic and Conversation, in *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, 1989.
- 橋元良明 (1989). 背理のコミュニケーション：アイロニー・メタファー・インプリケチャー. 勁草書房.
- Hellman, D. (2008). *When Is Discrimination Wrong?*, Harvard University Press.
- Jorgensen, J., Miller, G. A., and Sperbert, D. (1984). Test of the Mention Theory of Irony. *Journal of Experimental Psychology*, 113 (1), 112-120.
- 金友子 (2016). マイクロアグレッション概念の射程. 生存学研究センター報告 24, 105-124.
- 前田朗 (2013). ヘイト・スピーチを理解するために. 前田朗 (編) なぜ、いまヘイト・スピーチなのか：差別、暴力、脅迫、迫害. 三一書房.
- Sue, D. W. (2010a). *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*, Hoboken, N. J.: Wiley.
- Sue, D. W. (2010b). *Microaggressions and Marginality: Manifestation, Dynamics, and Impact*, Hoboken, N. J.: Wiley.
- Sperbert, D. and Wilson, D. (1981). Irony and the Use-Mention Distinction, in P. Cole (Ed.) *Radical Pragmatics*, New York: Academic Press, 1981, 295-318.